

第2回 新潟市マンガ・アニメ情報館及び新潟市マンガの家 指定管理者申請者評価会議 会議録

日時：令和5年1月10日14時00分～16時40分
 会場：IPCビジネス支援センター セミナー室 (NEXT21 12階)
 委員：齋藤 友子 (株式会社ガイナ プロデューサー)
 齋藤 優介 (燕市産業史料館 学芸員)
 本間 武 (ちとせ社会保険労務士事務所 代表)
 渡邊 信子 (Art 税理士法人 代表)

事務局：文化政策課

傍聴者：2名

公開プレゼンテーション議事録：

司会	<p>これより、新潟市マンガ・アニメ情報館及び新潟市マンガの家の公開プレゼンテーションを始めます。</p> <p>今回申請があったのは1団体 (にいがたアニメ・マンガプロジェクト共同体) です。それではプレゼンテーションを開始してください。プレゼンテーション時間は15分です。それでは、よろしくお願ひします。</p> <p><プレゼンテーション省略></p>
申請者	引き続きヒアリングを行います。「にいがたアニメ・マンガプロジェクト共同体」様に対して、質問がある方はお願ひいたします。
本間委員	新潟で働く若い人が結構多いと思いますが、就職される方への活動・アプローチについて、何か考えていることはありますか。
申請者	<p>就職される特定の方に対するアプローチはありませんが、今はSNS時代で情報があふれていて、どこにいても同じような情報を受け取ることができるので、若い方たちは「どこにいても良い」という感覚になってきているのかなと思います。そうした時に、ちょっとしたきっかけや何か付加価値を感じることができるものがある場所が、心地いいと感じるところになると思います。たとえば全国で5、6カ所しかやらない企画展をやると、開催する場所を注目しますよね。「好きな作品の企画展を新潟でやっている！また新潟だ！」ということが続いていくと、「じゃあそういうところがいいよね」ということになります。「新潟には必ず何かある」ということが若い人だけでなく、企業やアニメスタジオにも長い時間をかけて定着してきているということが強みだと思っています。当施設でも、今までどおり全国から注目されるような大規模で付加価値のある展覧会を開催していったら、新潟という名前が全国の人に刻まれるようになっていくといいなと思うし、地元の方や若い人たちにも気付いてほしいなと思っています。PRの方法というのは色々な方法があると思いますが、やり続けるというすごく地道なこと、即効性のあることを続けるというのが、すごく力があることなのではないでしょうか。</p>
本間委員	発信方法はどのようにしていますか。
申請者	主にはテレビCMやチラシ・ポスターです。加えて今は、インターネットを開くたびに広告

	<p>が出てくるような広告の形もあります。もちろん SNS、Twitter、インスタなども行っています。企画展によっては紙で広げた方が伝わるものと、スマホにダイレクトに届く広告媒体を使った方が伝わるものがあり、作品の種類、客層によって届け方が違います。企画展の内容ごとに広告手段を変えていき、より効率的な運営をしていこうと考えております。</p>
渡邊委員	<p>プレゼンが最後まで終わらなかったこともあります。プレゼンテーションの資料では、今までやってきて、これからどう変えていきたいとか、さらに何をやっていきたいというのがよくわからなかったのが残念でした。</p> <p>事業理念・運営方針に「全国」へ発信と書いてありますが、全国ではなく資料の中にあります「世界」だと思えます。「新潟をコンテンツ産業のシリコンバレーにする」というところが中心ならば、世界を見て、今後どうしていきたいか、今までこれをやってきて、その基礎を踏まえたところでもっと花開かせていくなどということ伝えてほしかったです。</p> <p>次の5年に向けて、10年やってきたものを踏まえたところでどう変えていきたいか、どう思っているのかということ、もう少しきっちりお話いただけますでしょうか。</p>
申請者	<p>我々もプレゼンテーションの用意はしておりますが、この30分間の時間の中でそういった質疑応答ができるかなということも踏まえてお話ししていました。資料の方は、プレゼンの資料だけでは足りないかなと反省しております。</p> <p>「世界」というキーワードが出てきました。世界というのが当たり前になってしまっていて気づいていないかもしれません。このジャンルではもう日本、世界は関係ないので、我々の価値観もそうになっています。全国と言っているのは、この文化を広める対象として全国と言っています。次の世代が育つには、この文化を理解していただく、応援していただく人たちを増やさなければならないので、全国でまず応援していただける人たちを増やすと、その人たちが育てる子どもたちが応援されて、どんどん手を広げていきます。それが最終的には世界に届いていくという感覚があります。館の役目・役割として、その文化を隅々の方まで知らしめていくということがあります。それが今後の一つの発展を作るきっかけかなという意味で、全国という表現となっております。</p> <p>私の一つの目標としては、新しい表現方法に挑戦したいと思っています。5年間の間にやりたいこととして、次来た時に「こんな面白さがある」と気づいてもらえるような新しい展覧会の形を、作品を作る側である権利元や作者、展覧会を作るプロモーターの方たちと模索できないかということも挙げています。コロナ時代になり、デジタルミュージアムが当たり前の時代になりました。今までのようにマンガ原画をただ飾る、アニメの場面を飾るというのではなく、デジタル技術を応用するなど、もっとインタラクティブな表現方法の作家や作品を探し当てて、タグを組んでいきたいと思っています。</p>
齋藤友子委員	<p>昨今アニメ・マンガ関連の展示規模が大きくなる傾向が強く、一展示にかかる経費がおそらく相当上がってきているのではないかと感じています。これから5年間、限られた予算金額の中で、どういうビジョンで展示を企画し運営をされていくか、教えていただけますでしょうか。</p>
申請者	<p>本当に苦勞してきています。かなり無理してやっている部分、予算的な部分もありますが、</p>

足りない部分は補えばいいだけなので、今いろんな企業さんに入らせていただいております。2年前ぐらいから、企画展をやるにあたって、企業さんと一緒に実行委員会を組むことが定番化してきています。積極的な企業さん、お話を聞いていただける企業さんと組み、実行委員会のメンバーを増やしています。金銭的なフォローというのは、そういった企業さんを増やすことだと思っていて、イコールそれは新潟における文化のグレードを上げていくということだと思っております。「うちの会社がこんな作品の企画展をやった」ということが企業さんの魅力になり、PRになっているということをもっと循環させていくためには、やはり「新潟でマンガ・アニメってすごく大きい展示会もあるし、行政もそこを応援しているし、施設もあるし、学校もあるしすごいよね」というものを維持し続けていくということが、すごく大事だと思っております。

今一番悩んでいるのは、面積が足りないということです。展示物が入らないと呼べないため、実際何回か断られています。入居施設と相談しながら、可能な限り同じフロアを広げ、館の外まで展開をしていくということが、これからはもっと必須になってくると思っております。他の施設との連携ということテーマとして持っています。そもそもマンガの家と情報館を連携させて、市内を回遊させるという新潟市のまちづくりのコンセプトの上に立っている施設なので、もっと広域に考えて、例えば新津美術館、砂丘館と連携した取り組みや、いろんなところに散りばめてまちを回遊させるような展示会の方法はないのかなど、そういったものをチャレンジしたいと思います。そういった形で対策といたしますか、面白いものに繋がっていければと考えております。

齋藤友子委員

若い人たちに対して、見るだけではなく体験というのも今とても求められています。その中で、マンガの家では現在「マンガのいっぽ」をやっているかと存じます。それとかなり長く続けられていると思うので、逆にその次の一手、より深く何か体験してもらおうといったようなプランはありますでしょうか。

申請者

「マンガのいっぽ」という名前の制作講座が非常に好評で、しかもキャリア教育、職業啓蒙の一環という形で修学旅行などに使われるケースが多くなってきました。コロナの時代はなかなか止まってしまいましたが、再開した途端に旅行者から問い合わせが非常に増えてきて、チャンスだと感じています。今までやってきたことを続けるだけではなくて、拡大していきたいと思っております。現状には満足しないようにということで、この10年は講座の内容のメニューを増やしましたので、メニューは大体揃ったかなと思っております。

発展的な何かという部分でいうと、観光と繋げるということはまだまだ大きくはできておりません。現状は、旅行会社さんからの問い合わせに答えるという形になっておりますが、マンガの家と情報館で連携した形で、「マンガ・アニメをきっかけに職業教育ができますよ」というようなツアーパックの提案をできないかと考えています。新潟は修学旅行先としてもすごく魅力的なまちだと思うので、その中の一環としてマンガ・アニメというのを使ってもらいたいなと思っております。旅行会社さんと連携しながら、そういったパックを売っていけないかなというのが一つあります。

また、マンガの家というと、創作の基地という位置づけがあるので、全国各地にある創作系の団体の展示物を追加していく、PRをしていただくなどという形で、コラボレーションできないかと考えています。ものづくりをする際にはここに行くとなんかきっかけがあるみたい

	<p>な、何かそういう情報発信基地になるといいのかなと思っています。</p> <p>あともう一つはマンガ大賞です。にいがたマンガ大賞との連携で、マンガ講座で制作したものをそのままマンガ大賞にすぐ応募ができる環境というのを作りたいと思っています。そういった市の事業、他のマンガ事業とも連携した講座の内容にしていきたいと思います。</p>
齋藤優介委員	<p>インバウンド的な海外に向けてのアピールや、展開について何かお考えはありますでしょうか。</p>
申請者	<p>海外は意外とこっちから打たなくても気付いてくれているというところがこの文化の特徴にあるかなと思っています。最近、YouTuber などの取材がすごく増えてきました。動画発信は海外にはすごく受けがいいので、今後はそういった動画発信をうちの館からも積極的に行っていきたいです。すでにマンガの家の方で、マンガの描き方動画を発信していたりもしますが、もっと観光の魅力の部分を、新潟のまちの魅力を合わせた動画で紹介するといったものに取り組みれば面白いのかなと思います。</p>
齋藤優介委員	<p>最近、マンガ・アニメ分野で伝統工芸、民俗芸能などが取り上げられており、より地場に特化したコンテンツも増えてきています。まだ想像段階でも構いませんが、そういった暮らしとマンガコンテンツが結び付けられるような動きや、どういった形で結び付けられたら良いというような展望はありますでしょうか。</p>
申請者	<p>今すでに行っているのは、商品開発という大げさですが、地場の商品と我々がお預かりする企画展コンテンツのコラボレーションです。実績もございます。</p> <p>万代島美術館や新津美術館などの他館でも、コンテンツを活用して地場の産業の思いがけない商品とコラボし、たくさん商品が売られている実績も持たれています。すごく見習いたいかなと思っています。我々も予約注文という形でオリジナル商品の日本酒を作らせていただきました。まずはそういうところからが、一番リアルかなと思っています。経験値もあるので、これから加速させていきたいと思っています。</p> <p>それもマンガ・アニメに対する文化力というか、文化応援力みたいなものが地場で育ってこないとなかなか実現しませんし、ましてやコンテンツそのものを地場と繋げるというのは相当なパワーが必要です。我々はコンテンツを作る側ではないですが、新潟でもそういったもののきっかけを作ることにはできると思うし、アニメスタジオやコンテンツと繋がっているというネットワークを持つメンバーも共同体の中にはいるので、うちが発信というよりも、うちの内部で計画して作ったコンテンツが新潟のものだったら最高みたいな、そういうストーリーは考えています。</p>
渡邊委員	<p>企画展は企業が支援をしているというお話がありましたが、それは「広告宣伝費」という形なのでしょうか。それとも、ファンクラブのような形で応援するネットワークができていて、何か投げかけた場合に答えてくれるような関係性が、地場の企業との間に築かれているということでしょうか。</p>
申請者	<p>新潟市から預かる予算の中でやりくりしますが、企画展の実施自体に企業も出資されます。</p>

	<p>当然企業さんも利益は追求されますが、「我々の会社がこの作品を応援しています」ということが、集まったお客さんたちの目に自分たちの会社が触れるということをメリットとして考えていただけるというのが一つあります。</p> <p>ただ、一番は経営者の方や企業を動かしている方が、マンガ・アニメを好きということです。この文化がもう当たり前なものになっていて、版画美術展や西洋美術展に出資するのと同じ価値を感じてらっしゃいます。そういう方たちが増えてきているというのは、この30年でマンガ・アニメ文化がグレードアップしてきた一つの証明なのかなと感じます。</p>
渡邊委員	<p>プロジェクトごとに資金を集めて、1回ずつ精査をして、運営費を出資するというのでしょうか。</p>
申請者	<p>そのとおりです。</p>
司会	<p>他にございませんようですので、以上でヒアリングを終了いたします。にいがたアニメ・マンガプロジェクト共同体様、お疲れさまでした。ご退出ください。</p>